

チェスタトン

上水敬由

紀伊国屋で立ち読みをしていたら、たまたまある雑誌で渡部昇一がチェスタトンについて書いているのが目があった。その内容にちよつと興味がわいて、帰宅してから以前買っておいた『著作集』をひさしぶりに読んでみた。

ずいぶん長いあいだほっぼらかしにしたので表紙のところどころにシミが出はじめている。まったく情けない状態。それはともかく、興味を感じた部分についてはじきに確認ができたのでよかったのだが、読んでいるうちに気づいたというか感じたことがあるので、そちらの方を書いておく。

チェスタトンは『正統とは何か』で「私自身は、宇宙が物質的必然に支配されていると考えるより、一つの人格によつて創造されたものだと思えるほうが筋が通ると確信している」と述べる。「物質的必然」うんぬんは当時の論点としてあげてあるのでどうでもよいが、問題は「一つの人格」である。宇宙の創造がひとつの人格によるとするのは、ユダヤやイスラムなどに共通した主張だが、私自身はというと、そんなことはどうでもいいんじゃないのといういいかげんな立場で、そのことをあらためて「確信」させられたのだ。そもそもどうしても「一つの人格」を必要とする、その発想そのものの根っこところが私には理解できない。つまり私には西洋がわからないということだろう。

もうひとつは、チェスタトンがあくまでも二十世紀初頭イギリスの（いま現在）に対してキリスト教正統の立場から論争をしかけているのだということ。これもわかつたつもりでいて、じつはわかつちやいなかつたというお話。たとえば『棒大なる針小』のなかで「たまたま上院議員になつたのではない上院議員はほとんど皆、賄賂を使って上院議員になつたことを先刻ご承知なのだ」と批判されるバルフォア氏なる人物は時の宰相であり、日英同盟によつて日露戦争とも深いかわりをもつていたことなど、ちよつとしらべればすぐにわかるはずではなかつたか。反省のタネはつきない。

ついでにいえば、渡部が指摘しているピーター・ミルワードによる解説の誤り（『文学におけるヴィクトリア朝』でチェスタトンがいう貴族と金持ちとの「妥協」を宗教と科学が妥協したとする）は、あまりに作為が見えすいっているので、ミルワードがイギリス人だつたからだとか、イエズス会の宣教師だつたからだとか、その裏側について憶測をめぐらしてみるとそれなりに楽しい。

ところで「人格」とくれば、当然名前が問題になる。

それは台風やハリケーンに名前をつけたりすることとも何かかわりがあるのかもしれない。わが国では年ごとの発生順に番号をふることにしていて、そういうやり方があたりまえと思っていたが、よその国ではどうもそうじゃないようだ。進駐軍がいたところにカスリーンだのジェーンだのといった台風が来たとき聞いたので、アメリカだけがそうなのかと考えていたら、じつは番号の方が少数派だつた。たとえば今年フイリピンを襲つた台風三十号は国際的な呼称としては海燕（ハイエン）という。

明治五年の『太政官布告』で太陽暦を採用したときに月の呼び名を数字にしたりしたせいで、こちら側の自然に対する名づけの感覚が変わってしまったのかもしれないが、いずれにせよ、名前をつけることによつて現象が実体化するということはよくいわれることだ。裏をかえせば、われわれは名前を失うことでまた何か別のものを失つたのだろう。